



大溪老茶廠



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/235/



エリア

桃園市

テーマ

歴史

産業

大溪老茶工場

「美しすぎる紅茶工場」で感じる 台湾紅茶の歴史

「美しすぎる紅茶工場」として一躍人気になった大溪老茶廠の前身は、日本統治時代の1926年に建設された角板山製茶工場です。台湾のお茶と言えば烏龍茶がまず思い浮かびますが、この工場生産された高品質の紅茶は、当時ロンドンの市場でも高く評価されました。戦後は、官営の台湾茶業公司の大溪茶場となり、1955年に民営化、56年には大きな火災に見舞われたものの、59年に再建されました。その後、台湾紅茶が世界市場での競争力を失ったことで、一度は1995年に操業停止に追い込まれましたが、2010年に新たなコンセプトの下で、大溪老茶廠として生まれ変わりました。

学びのポイント

1.

台湾における茶産業の重要性

「400年の台湾史」という言い方がありますが、この400年の中で、今日のように台北がこの島の政治的・経済的中心であった期間は、実はそれほど長くはありません。1624年から62年まで台湾島を統治したオランダ東インド会社と、それを駆逐した鄭氏一族は、現在の台南に拠点を置き、それに続く200余年の清朝統治も、おおむね台南を中心に展開しました。台湾島の政治的・経済的中心が南部から北部に移ったのは19世紀後半のこと。当時国際市場で高い商品価値を有していた茶葉が北部で生産されるようになったこと、1860年の北京条約で台北に近い淡水が条約港として開港され、台湾茶を世界に輸出する窓口の役割を担ったことが要因とされています。

2.

日常に寄りそう紅茶のルーツ

日本の台湾統治が安定を見せた1920年代、従来の包種茶、烏龍茶に加えて、紅茶の生産が始まりました。1926年に現在の大溪老茶廠の前身である角板山製茶工場を建てたのは、日本の三井合名会社で、28年に「合名茶」の名称で国際市場に進出した台湾産紅茶は、世界的に高い評価を得ました。1930年代には「三井紅茶」から「日東紅茶」にブランド名を変更、今なお多くの人に親しまれる紅茶商品のルーツは、実は台湾にあったのです。最盛期には三交代制で昼夜休まず操業し、年間600万トンを生産してもなお追いつかないほどの海外需要がありました。当時紅茶は極めて高い商品価値を持ち、「黒い金(きん)」とさえ呼ばれたと言います。

3.

「美しさ」の理由は？

ダージリンの紅茶工場を模した大溪老茶廠の外観は、確かにすっきりとして美しいものですが、「美しすぎる」とまで言われるのは、古い工場の魅力を残しつつ、現代のセンスでリノベート(改修)した空間設計の妙、取り扱う商品のパッケージとディスプレイの美しさがあったことです。現在の台湾のクリエイティビティが十分に表現された空間で、現代的な自然農法で生産されたお茶を味わいながら、在りし日に思いを馳せてみるのもよいかもしれません。